

『ヨハネ福音書講義 (Das Johannes-Evangelium)』で、キリストが「個別な自我に確かな自分を感じることができるような事柄を人々に提供した」とし、血縁の「愛」から霊的な人類「愛」へと「愛」を進化させたと述べている。また、一九一〇年に上梓された神秘主義的な著作の代表作である『神秘学概論 (Die Geheimwissenschaft im Umriss)』では「包括的な友愛の理想」として語られる。このキリストについての考察は、シユタイナーが一九一〇年から書き始めた『神秘劇四部作 (Vier Mysteriendramen)』において、善悪も含め、すべてを統合する「愛」の力として提示されたのである。「愛」をどのように人類に広げ、深化させていくかが、シユタイナーの課題であった。

## 二人称としての神——マルティン・ブーバーの神概念——

田島 卓

現代における神の諸問題を取り扱った『神の蝕』(一九五二)の冒頭で、ブーバーはふたつの対話の思い出を語っている。最初の対話では、彼は無神論者に対し、我々の知覚を支える普遍的／根源的な場所としての神を説く。たとえば色彩は光の振動と、我々の受容器官の「出会い」によって生じるのだから、その出会いの場所として、神が要請されるといふのだ。このことによつて、ブーバーは無神論者に神の存在を承服させることに成功した。だが、ブーバー自身はこれを失敗と受けとめていゝる。なぜなら、このように示される神は、所詮「哲学者の神」でしかないからだ。これに対して、もうひとつの対話で、ブーバーは、そのつど、各人が己の深みから、「あなた」と呼びか

ける、そのような神について語っている。この二つの対話は、それぞれ二つの神概念を代表しているように思われる。場所論的神と人格主義的神である。

ふたつの対話は、フリードマンによれば、前者が一九二〇年から一九二一年、後者が一九二二年に、パウル・ナートルプとの間でなされている。したがって、ここで示されているような神理解は、『我と汝』(一九二三)以降のブーバーの神理解を一貫して規定しているものと解してさしつかえない。本発表の目的は、以上のことを踏まえて、ブーバーが「永遠の汝」として示した神を理解し直す、ひとつの可能性を試みることである。

興味深いことに、『神の蝕』で示されたような二つの神概念は、他の著作の中で、世界概念として示されたものと親近性を持つている。『神の蝕』における最初の対話では、「出会いによる知覚」によつて世界が構成されると説かれていたが、これと同じモチーフが、ただし神に言及しないかたちで、『人間とその形像物』(一九五五)のなかに現れている。

一方、『対話』(一九三〇)中の「責任」という節では、独特な世界の捉え方が展開されている。他者と共有されえない世界という考え方である。この独特な世界概念は二人称関係構造の特徴である排他性(あるいは専一性)という契機に着目するならば、理解しやすい。ここで示されているのは二人称的世界概念だと理解できる。

してみれば、「出会いによる知覚」によつて構成された世界は、たしかに存在者同士が「出会い」うるという特性を備えた人間存在に固有の世界である。けれども、この世界は、とりわ

けて個別的な人間を要求しない。この世界は、むしろ、間主観性を通して、三人称の世界になってしまう。

— 以上のような世界の二様態を確認した上で、神概念を振り返ってみる。二人称の世界を排他性、三人称の世界を包括性という言葉によって特徴づけたい。『我と汝』第四七節を見ると、ここでの神概念は、排他性と包括性が切りむすぶところで述べられていることがわかる。してみれば、ブーバーは、包括性によって特徴づけられる場所論的神概念を、排他性によって特徴づけられる二人称的神概念によって語り直そうとしているのではないだろうか。

そこで、本発表は次のことを提案したい。ブーバーの「永遠の汝」は、本質的に無人称的であるものを、二人称の「あなた」として受け取り直す試みだったのでないかということである。それは現代的に言い換えれば、場所論的神学をふたたび人格主義的神学へと取り戻す試みでもあったはずである。

### ミシェル・アンリとキリスト教

古荘 匡義

晩年のミシェル・アンリ(一九二二—二〇〇二)の「キリスト教の哲学」では、彼が生涯をかけて構築してきた「生の現象学」が、キリスト教の聖書のことばと共に語られる。アンリ自身は自分の思索があくまで哲学であり、キリスト教を哲学へ還元しようとはしない。しかし、聖書の章句が生現象学に並置されるとき、どうしてもキリスト教の哲学的解釈のようにみえてしまう。アンリがキリスト教を引用しながら生の現象学を提

示する意義とは何であろうか。それは、聖書の章句とともに生の現象学が語られることによって、「キリスト教の哲学」が救済の理論であると同時に救済の実践にもなった、ということだと考えられる。

第一に、「キリスト教の哲学」は、エゴイステイックな人間の生の救済に関する理論である。人間の生は、自己自身から距離を取ることができずに根源的に自己を被る受容性において、自ら自己自身を体験し、自らを感情や行為として実在的に顕にする。しかし人間は、〈自分自身で生ける者となることはできず、真に実在的に体験しうるのは自分自身でしかない〉という「超越論的エゴイズム」に陥っている。このエゴイズムから「救済」されるには、自分自身で自己体験を始めることができる絶対的〈生〉の自己体験の過程に一体化して生けること、生ける者の生の「神化」が必要とされる。この神化は行為の次元において可能になる。すなわち、生ける者自身の我意に発するのではなく、〈父〉の意志、すなわち絶対的〈生〉の自己「産出の過程」によって引き起こされる行いが、生ける者の生の「パトリス的な内的自己「変容」を引き起こす。このような実存の変容を被った自己自身を根源的に体験することで、自分を超えたものにおいて生きていることを覚知し、エゴイズムから救済される。

第二に、「キリスト教の哲学」はエゴイズムからの救済の理論であるだけでなく、アンリ自身の実存の変容および救済の実践であるように思われる。

生の現象学的分析である「キリスト教の哲学」において、ア